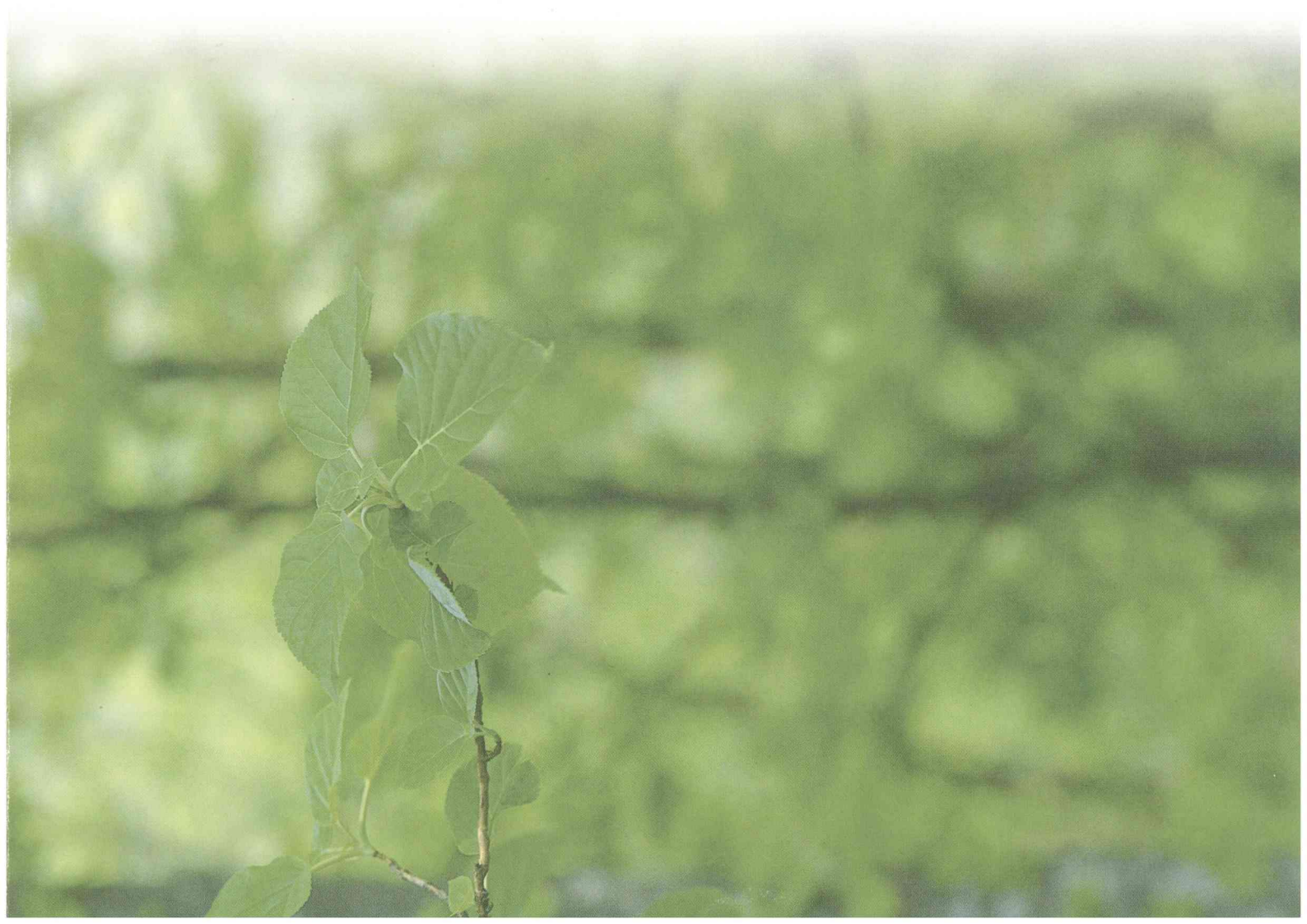


一般社団法人
日本看護研究学会中国・四国地方会

30周年記念誌



中国・四国地方会設立30周年記念誌発行に寄せて



一般社団法人日本看護研究学会 中国・四国地方会

会 長 内 田 宏 美

日本看護研究学会が発足して早々の1985年に、中国・四国地方会の前身であるC地区（近畿・四国）に全国に先駆けて地方会が発足して、今年で30年になります。

運営委員会では、記念事業として、第30回学術集会での記念講演と30周年記念誌の発行を計画しました。歴代の運営委員長、学術集会実行委員長の皆様が当時の様子や思い出について快く執筆くださり、また、地方会発足当初から熱心に活動されてこられた深井喜代子先生には、記念講演とその内容の記念誌への掲載を快諾いただきました。そして、本学会及びC地区地方会立ち上げの立役者であり、我が国の看護学をリードし続け、多くの門下を育成された野島良子先生には、看護と看護学の発展に対する熱いメッセージを頂戴しました。

一方、学術集会抄録集の内容を分析して、地方会の学術的発展の軌跡を整理する作業も行いました。分析に先立ち、副会長の中西純子先生から秘蔵の抄録集をご寄付いただき、欠番については大阪医科大学の泊裕子先生から借用して複写し、C地区地方会、北陸・近畿・中国・四国地方会、中国・四国地方会に3区分して製本しました。今後、地方会の重要な資料として引き継がれ、新たな号が追加されていくことになるでしょう。

演題の内容分析は、とても楽しく感慨深い作業でした。当初の手作り感満載のB5版の冊子がA4版の立派な厚い冊子に変わっていき、内容も年々充実してくる様は圧巻です。また、当初の演題の中に、今は看護界を牽引している先生方が研究者としてのスタートを切った足跡を見つけて何度手を止めたかわかりません。我が国の看護及び看護学の生の歴史と間近に向き合い、今、看護職として自分が在ることの意味を深く考える機会を頂戴しました。

西日本から看護学の新たな息吹を吹き込もうとした先人たちに学びつつ、今後の看護学の発展のために地方会が為すべきことを見定め、着実に一步を進める時が来ていると実感する次第です。

日本看護研究学会 中国・四国地方会設立30周年に寄せて



一般社団法人日本看護研究学会

理事長 川口孝泰

先ずは、中国・四国地方会の30周年、おめでとうございます。と同時に「ありがとうございます」。

日本看護研究学会の近畿・四国地方会から、会員数の増加によって中国・四国地方会が独立して30年。私にとって感慨もひとしおです。私は、近畿・四国地方会の時代に兵庫県に居りました。私が兵庫県に赴任した年に、近畿・四国地方会は、近畿・北陸と中国・四国に分かれて活動が始まりましたが、しばらくの間は2つの地方会は活発に連携しながら活動を続けていた記憶があります。私は近畿・北陸地方会で世話人代表を務め、さらに兵庫県立看護大学において学術集会も開催させていただきました。その際には、中国・四国地方会との連携も盛んで、少人数ながら看護研究に対する情熱は高く、若い臨床家たちの情熱を強く感じていたように思います。私は、そのような環境の中で、近畿・北陸／中国・四国地方会に支えられ、現在の自分があると思っています。

今や、国内の看護系大学は250校を超え、看護系学会の数も50学会に迫る勢いで増えています。しかし、その数の増加に手放しでは喜べない状況を私は感じています。看護研究の質が落ちているように感じるのは私だけでしょうか？濃厚であった看護への情熱と、粗削りでも面白さとユニークさに溢れていた看護研究は影を潜め、形式ばかりが先行した研究が目立っているように思えるのです。この傾向は、我々が日本看護研究学会本体でも例外ではありません。

私は一般社団法人日本看護研究学会の理事長に就任して以来、最も活気があって面白かった時代は近畿・四国地方会の時代だったのかな。と思っています。私は、理事長の就任の挨拶文で「原点回帰」という言葉で、その思いを表現しました。このことについては、本会の将来構想委員会においても検討を始めています。他の学会に無い日本看護研究学会らしい個性とは、地方会活動にこそあるのではないのか！そして、その規模の活動こそが臨床家たちの発表や勉強の場となっているのではないかと思えるのです。

今後、日本看護研究学会をワクワクする学会にしていくためには、地方会と本会の在り方を見つめなおし、何よりも地方会活動こそが活動の原点にせねばならないと思っています。その意味で、今回の中国・四国地方会の30周年に感謝するとともに、今後の本会活動の支えとなる活動を引き続き進めてくださるようお願いいたします。

改めて30周年、おめでとうございます・・・と同時に、「ありがとうございます」。

中国・四国地方会活動のあゆみ

地方会の創生～C地区時代

- 1970年 教育学部特別教科（看護）教員養成課程を持つ熊本・徳島・千葉・弘前の4国立大学で連絡協議会を発足
- 1975年 第1回四大学看護学研究会開催
- 1981年 日本看護研究学会に名称改正
- 1985年9月8日 本学会総会において4つの地区割が決定
- 1986年3月10日 他の地方会に先駆け、C地区（近畿・四国）地方会設立
- 1986年3月16日 C地区地方会第1回学術集会（於：京都）開催

※地方会誕生の背景と発足に向けた当時の関係者の方々の思いにつきましては、中国・四国地方会第24回学術集会の特別セミナーにおいて、本学会名誉会員の野島良子先生に「地方会の歩みと看護研究」と題するご講演をいただき、その全文が日本看護研究学会誌Vol.34, No.5, 123-129, 2011に掲載されております。

以後、有志による“世話人”が運営の中心となり、毎年、学術集会（3月）ならびにNEW看護学セミナー（夏季～秋季）の2つの事業を開催。NEW看護学セミナーは、“実のあるものを自分で獲得しよう！”“リラックスして学びを深めよう！”のコンセプトのもとにその当時、新しくタイムリーなテーマを取り上げ、グループワークや実習、施設見学なども含めた参加型の地方会らしい活動でした。

C地区から近畿・北陸／中国・四国地方会へー合同活動期ー

1993年、本学会の地区分け変更により、C地区地方会は近畿・北陸地方会、中国・四国地方会に分離され、それぞれに代表者と事務局を置くこととなります。しかし、当時、中国・四国地方会は会員数、世話人数も少なく、単独地方会として活動が続けていくには準備不足でした。また、地方会の発足からともに活動してきた経緯もあり、当分の間、事業は合同で開催することし、学術集会とNEW看護学セミナーを両地方会で交互に担当することとしました。

2002年、看護系大学の急激な増加を背景に中国・四国地方会と近畿・北陸地方会の合計会員数は1600名を超え、中国・四国地方会単独の会員数も600名を超えます。この頃には会員数の増加や地理的に広範囲にわたることなどから、地方会活動を合同で続けていくことが困難となり、今後のあり方を検討するための両地方会のメンバーからなるプロジェクトチームを発足。2003年3月の中国・四国地方会総会にて分離独立活動が承認されました。

中国・四国地方会単独活動へ

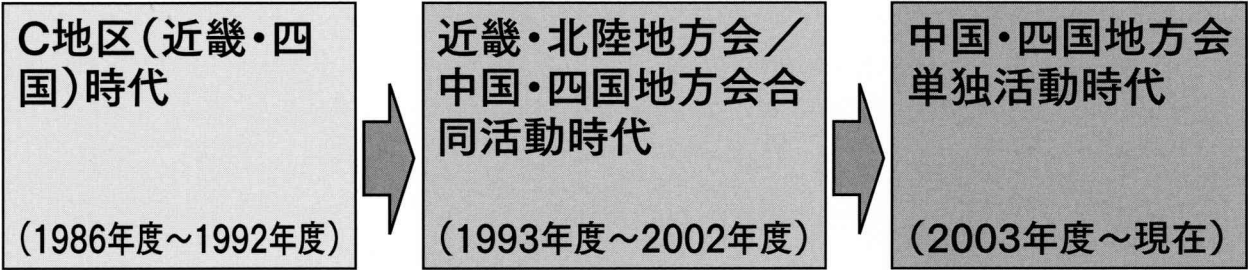
2003年4月より中国・四国地方会単独の活動となるにあたって、今後の活動のあり方について検討するプロジェクトメンバーを募り、1年間の準備期間を経て、2004年より各県2～4名の運営委員からなる新運営体制に移行します。地方会会則を改正し、運営委員の互選により運営委員長（世話人代表から名称変更）、会計・事務局2名、会計監事2名を選出し、その他の運営委員も広報委員会（4名）または学術委員会（各県1名以上）のいずれかに所属する体制となりました。広報委員会はニューズレターの発行を所管し、学術委員会は学術集会における研究推進企画を担います。地方会は組織的な運営が行われるようになり、これを機に事務局も運営委員長の所属する組織内に置くこととなり、2005年度には地方会のホームページもいち早く開設しています。

2014年、本学会の「地方会細則」が改正になり、これに伴い地方会役員構成・選出方法について地方会会則を再び変更。2015年に各県の運営委員をWeb選挙で選出し、選ばれた運営委員のなかから役員（会長・副会長・会計・監事）を互選する現体制となっています。

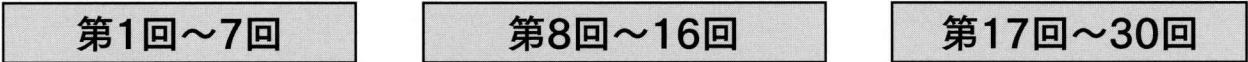
現在、そしてこれから・・・

2015年には中国・四国地方会会員数は1000名を超え、地方会分離当時に比べると約2.5倍に増加しています。地方会のメイン活動である学術集会は中国・四国9県の各地を巡って開催され、毎回、地元から多くの非会員の方たちにも参加を戴いています。小規模開催である地方会の良さを活かし、和気あいあいとしたムードの中にも実行委員長を中心に工夫を凝らし、看護研究の発展に向けたチャレンジが今も行われています。

変遷



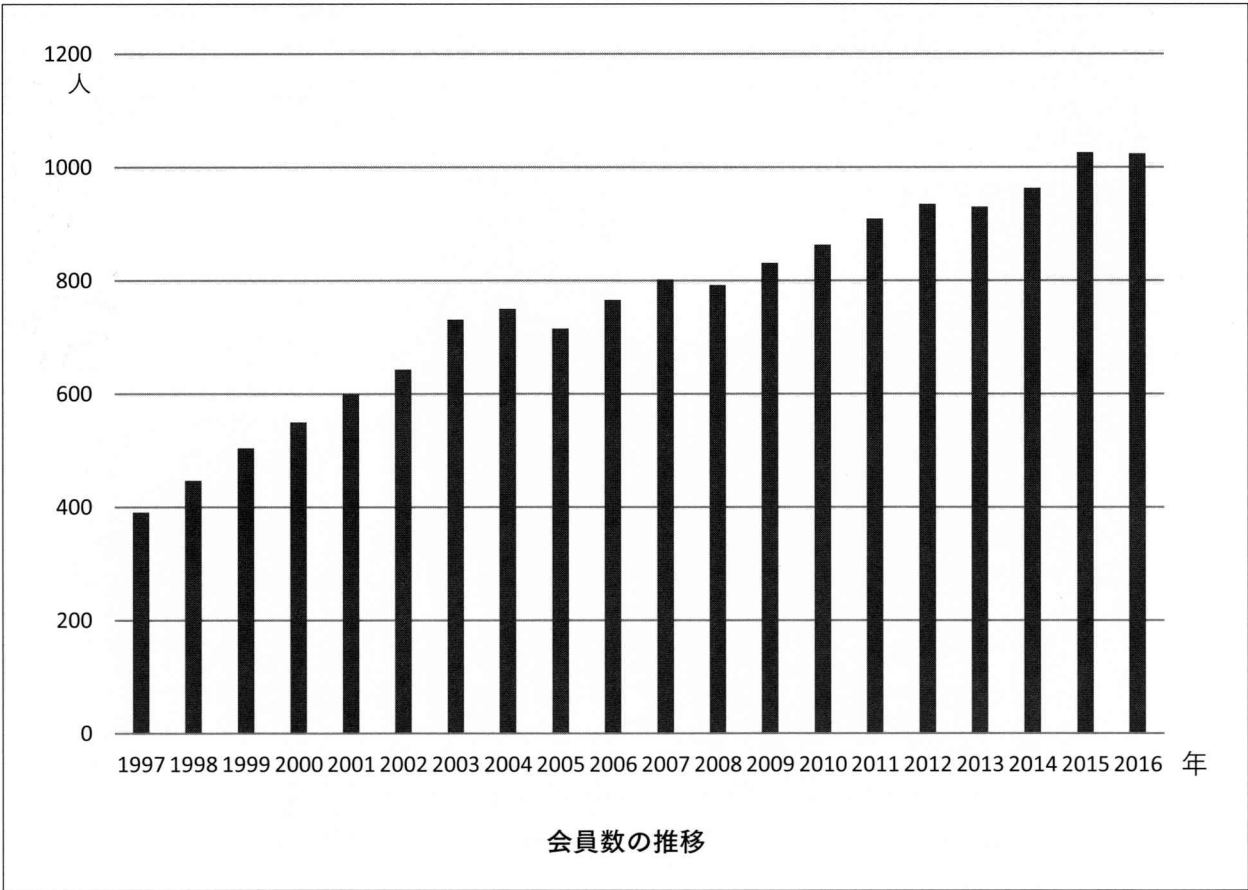
学術集会



NEW看護学セミナー 1～12回開催

ニュース・レター 1～24号発行

ホームページ開設



NEW看護学セミナー&ニュース・レター発行の歴史

NEW看護学セミナー

	回数	開催年度	場所	テ　　マ	参加数	プランナ
C 地 区	1	1988	滋賀	看護研究の立案からパソコンによるデータ処理までの実際	不明	早川 和生
	2	1989	京都	看護診断を診断しよう！	不明	野島 良子
	3	1990	京都	患者さんの体験をいかに研究へ	30	近田 敬子
	4	1991	京都	看護技術の再発見ータッチングとは	150	宮島 朝子 近澤 範子
	5	1992	神戸	タッチ II	91	新藤 幸恵
近 中 畿 国 ・ ・ 北 四 陸 国 地 区	6	1994	広島	タッチ III “看護診断と治療”	180	野島 良子
	7	1997	兵庫	健康回復力を高める病室・病棟環境の創造	60	川口 孝泰
	8	1998	岡山	ヘルスプロモーションと健康教育	98	安酸 史子
	9	1999	兵庫	なぜ？からはじまる看護	117	近田 敬子
	10	2000	徳島	高齢者の肺炎を防ぐ口腔ケア： 新しい看護技術の方法と科学的根拠	55	道重 文子
	11	2001	兵庫	看護における患者個人情報の管理	43	瀧川 薫
	12	2002	広島	求められる看護実践能力の育成への方策を 考える	79	田島 桂子

* 各回で募集人員は異なる

本学会前日企画：地方会プレセッション

開催年月	場　所	企　　画	企画担当者
1990年 7 月	京　都	第16回日本看護研究学会プレセッション カリスタ・ロイ博士記念シンポジウム	東　サトエ
1996年 7 月	広　島	第22回日本看護研究学会プレセッション 縦断的研究の方法を学ぼう！	野村美千江 西田 直子

ニュース・レター発行

1993年にC地区（近畿・四国）地方会から近畿・北陸地方会と中国・四国地方会に地区再編成が行われて以後、中国・四国地方会は単独の取り組みとして毎年ニュース・レターを発行してきました。内容は年度の事業計画や学術集会の案内、役員選挙の公示や結果報告等で、会員の皆様に地方会活動をお伝えするものです。第1号（1995年）～12号（2004年）までは、事務局が企画・編集を行っていましたが、中国・四国地方会として新運営体制で事業活動を行うようになった2005年第13号からは広報委員会がその役割を担うこととなりました。

1号（1995年）～12号（2004年）	事　務　局：中西 純子
13号（2005年）～14号（2006年）	広報委員長：深田 美香
15号（2007年）～18号（2010年）	広報委員長：猪下 光
19号（2011年）	広報委員長：川西千恵美
20号（2012年）～21号（2013年）	広報委員長：當目 雅代
22号（2014年）～23号（2015年）	広報委員長：池田 理恵
24号（2016年）～	広報委員長：猪下 光

学術委員会企画セミナー

学術集会	特別セミナー企画	講師 & ファシリテーター	概要	学術委員会委員長
第19回	「効果的な学会発表 ープレゼンテーションの方法ー」	野島 良子 谷垣 静子 & 学術委員	実際に第19回学術集会で口頭発表された演者1名の方の発表を許可を得て録画し、セミナー参加者とともに振り返った。	谷垣 静子
第20回	「看護研究のそこが知りたい！ 疑問から研究課題へ」	野島 良子 上岡 澄子	研究疑問をどう研究課題、計画立案につなげていくか、質問者1名を会員から募り、公開研究指導を行った。	谷垣 静子
第21回	「看護研究：看護論文作成のためにー求めるもの、伝えるものー冷静な情熱で緻密に構成する研究とその表現世界へあなたも挑みましょう！」	宮腰由紀子 片岡 万里	論文作成の基本的事項について講演	村上 生美
第22回	セミナー1「何をみつける？どのように見つける？どのように伝える？」 セミナー2「看護研究の進歩」	宮腰由紀子 マーシャA. ペトリーニ*	レベル別にこれから研究を始める人対象（セミナー1）とすでに研究を手掛けている人対象（セミナー2）の2つのセミナーを開催。	村上 生美
第23回	セミナー1「初めて研究する方のために」 セミナー2「Culture Caring and Action Resarch」	宮腰由紀子 Jermian Mock*	引き続き、研究入門編と上級者編の2つを開催。セミナー2は、学術委員の紹介により日本滞在中であったJermiah Mock先生にご講演いただいた。	村上 生美
第24回	「地方会の歩みと看護研究 ーさらなる発展に向けてー」	野島 良子	地方会生みの親であり、本学会名誉会員になられていた野島先生に地方会発足の経緯と背景について語っていただいた。	中西 純子
第25回	セミナー1「看護研究における倫理ー基礎編：基礎的知識を身につけよう！」 セミナー2「看護研究における倫理ー実践編：こんなときどうする？研究におけるジレンマ」	内田 宏美 吾郷美奈恵 & 学術委員	セミナー1は基礎編として研究倫理の基礎についての講演。セミナー2は講師によるレクチャーの後、研究遂行上の様々な課題についてグループワーク。	中西 純子
第26回	「公開“研究のスタートアップ支援”」	佐原 玉恵 山中 道代	臨床現場から研究相談したいテーマ・計画を募集し、公開で助言指導を実施	中西 純子
第27回	「研究支援：文献の読み方 Part1：量的研究編」	乗松 貞子 & 学術委員	レクチャーを受けた後、グループ単位で課題文献のクリティックを実施	乗松 貞子
第28回	「研究支援：文献の読み方 Part2：質的研究編」	片岡 三佳 & 学術委員	レクチャーを受けた後、グループ単位で課題文献のクリティックを実施	片岡 三佳
第29回	「臨床看護師のための研究支援ー計画の立て方を中心に」	堤 雅恵	文献検討に続く、研究計画の立て方に焦点をあてた講演	片岡 三佳
第30回	地方会設立30周年記念講演会開催に代えて休止			祖父江育子

講師はできるだけ当時の学術委員が担当した。適任者がいない場合は会員に広げて依頼し、グループワーク等では学術委員がファシリテーターとしてバックアップした。 ※は非会員講師

地方会学術集会

地区	回	開催年度	場所	実行委員長（当時の所属）	参加者	演題数	メインテーマ（シンポジウムテーマ）
C地区 （近畿・四国）	1	1985	京都	近田 敬子 （京都大学医療技術短期大学部）	120	7	
	2	1986	京都	早川 和生 （近畿大学）	180	11	
	3	1987	徳島	秋吉 博登 （徳島大学）	—	9	
	4	1988	神戸	森田チエコ （神戸市看護短期大学）	—	14	
	5	1989	徳島	野島 良子 （徳島大学）	69	9	
	6	1991	神戸	西田恭仁子 （神戸市看護短期大学）	—	20	
	7	1992	滋賀	坂井 靖子 （滋賀医科大学附属病院）	105	8	
近畿・北陸 ／中国・四国地区	8	1993	愛媛	岡部喜代子 （愛媛県立医療技術短期大学）	167	23	地球に生きる草の根の実践家たち －生活を支えるケア－
	9	1994	京都	門田 邦代 （洛和会京都看護学校）	302	28	看護職の専門性を高める
	10	1995	富山	神郡 博 （富山医科薬科大学）	285	41	看護実践における臨床判断と看護診断
	11	1997	岡山	深井喜代子 （川崎医療福祉大学）	300	50	看護に資する基礎研究とは －看護学研究と看護実践をつなぐ－
	12	1998	滋賀	泊 祐子 （滋賀医科大学）	200	43	人々の生活の営みと看護活動
	13	1999	山口	野口多恵子 （山口県立大学）	241	60	看護 その創造する力
	14	2000	京都	西田 直子 （京都府立医科大学医療技術短期大学部）	300	64	21世紀における看護情報化の課題と展望
	15	2001	香川	岸（今井）敬子 （香川医科大学）	270	65	看護における倫理上の課題
	16	2002	兵庫	宮島 朝子 （兵庫県立看護大学）	129	37	見えないケアから見えるケアへ
中国・四国地区	17	2003	鳥取	宮脇美保子 （鳥取大学）	196	37	行動する看護職
	18	2004	島根	岡崎美智子 （島根大学）	130	29	臨床看護実践を支える看護学
	19	2005	愛媛	河野 保子 （愛媛大学）	196	40	看護実践におけるエビデンスの確立をめざして
	20	2006	高知	梶本 市子 （高知医療センター）	254	33	看護実践における地域医療連携
	21	2007	岡山	村上 生美 （岡山県立大学）	210	46	臨床における研究と基礎研究との融合
	22	2008	山口	山勢 博彰 （山口大学）	176	37	臨床看護研究にいかす研究デザイン
	23	2009	香川	内藤 直子 （香川大学）	250	71	臨床から“智”をつむぐ研究へのウェーブ
	24	2010	徳島	川西千恵美 （徳島大学）	300	49	先ず隗より始めよ！ 看護研究！ 実践と研究を繋ぐ
	25	2011	広島	宮腰由紀子 （広島大学）	195	42	看護活動を測る －諸科学と看護学の協働－
	26	2012	鳥取	前田 隆子 （鳥取大学）	217	49	クリニカルクエスト、そして研究！
	27	2013	愛媛	中西 純子 （愛媛県立医療技術大学）	366	56	今だからこそ看護の原点を振り返る
	28	2014	島根	吉川 洋子 （島根県立大学）	198	45	実践と研究で創造する“看護の知”
	29	2015	高知	坂本 雅代 （高知大学）	260	41	より良い看護実践への探求 －臨床における看護研究－
	30	2016	岡山	深井喜代子 （岡山大学）	233	44	実践との共同で推進する －看護学研究におけるグローバル化－

学術集会発表演題の内容分析結果

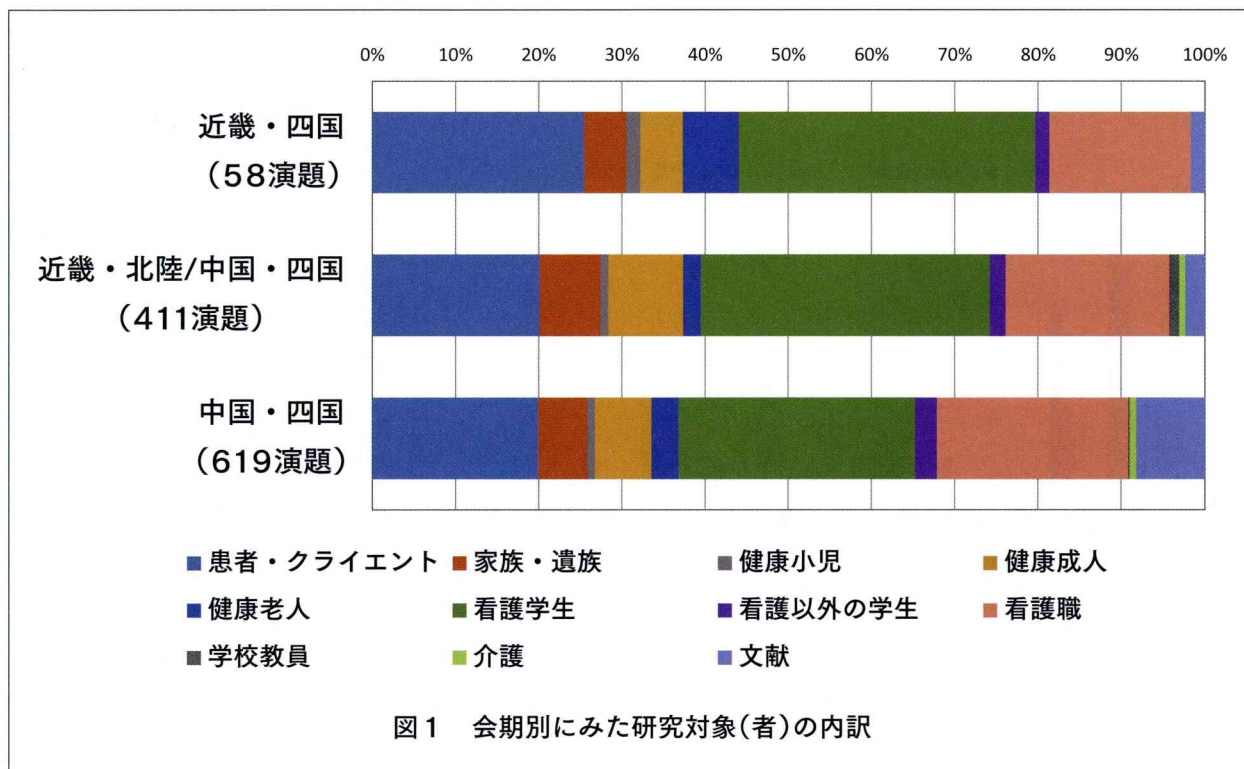
1. 研究分野別演題数の変遷（表1）

表1 研究分野別演題数の推移

地 区	開 催 回	研 究 分 野																		合 計	
		看 護 倫 理	看 護 教 育	看 護 技 術	看 護 管 理	急 性 期 看 護	慢 性 期 看 護	リ ハ ビ リ 看 護	ターミナルケア	がん 看 護	小 児 看 護	母 性 看 護	老 年 看 護	精 神 看 護	家 族 看 護	在 宅 看 護	学 校 看 護	地 域 看 護	感 染 看 護		そ の 他
C地区(近畿・四国)	1回	0	1	3	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	2回	0	2	4	0	1	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	11
	3回	0	1	1	2	0	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	4回	0	3	7	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
	5回	0	0	5	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	7回	0	0	2	1	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	1	0	8
近畿・北陸／中国・四国	8回	0	3	9	1	2	0	0	2	2	2	0	0	1	0	0	0	1	0	0	23
	9回	0	4	10	3	0	0	2	2	0	0	0	2	0	0	1	0	1	1	2	28
	10回	3	5	16	3	0	0	1	2	0	2	3	2	1	0	1	0	0	0	2	41
	11回	0	1	23	2	1	0	1	1	0	4	1	1	0	0	2	0	1	1	11	50
	12回	1	1	10	2	0	1	0	1	2	2	3	6	0	0	1	0	1	0	12	43
	13回	0	4	18	8	4	6	0	1	0	1	4	1	0	4	1	0	0	2	6	60
	14回	1	7	32	1	2	3	0	0	0	4	4	3	1	0	1	0	5	0	0	64
	15回	0	5	22	11	1	3	0	1	2	7	3	9	0	0	0	0	0	0	0	64
	16回	0	4	9	3	4	0	0	1	0	2	3	4	1	0	1	0	3	1	2	38
中国・四国	17回	1	4	8	8	0	0	0	0	0	5	2	4	2	0	0	0	3	0	0	37
	18回	0	3	5	3	3	2	1	0	2	1	0	2	0	0	1	0	3	0	3	29
	19回	0	1	12	3	2	4	0	1	1	1	1	4	4	0	3	0	2	0	1	40
	20回	1	7	9	2	1	1	0	0	2	1	0	2	2	0	3	0	0	1	1	33
	21回	3	4	19	0	2	4	0	0	0	1	0	4	1	5	1	2	0	0	0	46
	22回	0	7	12	2	4	5	0	0	1	0	0	2	0	2	1	0	1	0	0	37
	23回	0	9	23	5	2	3	1	1	3	3	5	6	2	0	1	1	3	0	3	71
	24回	0	6	20	6	0	2	0	1	1	1	3	0	3	1	3	0	2	0	0	49
	25回	0	4	12	6	2	3	0	0	3	0	6	1	0	2	2	0	0	1	0	42
	26回	0	8	14	8	3	2	0	0	1	1	4	4	0	0	3	0	1	0	0	49
	27回	0	1	19	10	0	1	0	0	4	3	6	1	8	0	2	0	0	0	1	56
	28回	0	8	15	2	2	1	0	0	1	2	3	1	4	3	2	0	1	0	0	45
	29回	1	3	15	7	1	0	0	0	2	1	2	2	2	2	1	0	1	0	1	41
	30回	0	2	10	4	1	1	1	1	2	2	1	3	1	1	6	2	2	0	4	44
	合計	11	108	364	104	40	49	12	16	29	49	55	68	33	20	37	5	31	8	49	1088
	割合	1%	10%	33%	10%	4%	5%	1%	1.5%	3%	5%	5%	6%	3%	2%	3%	0.5%	3%	1%	5%	100%

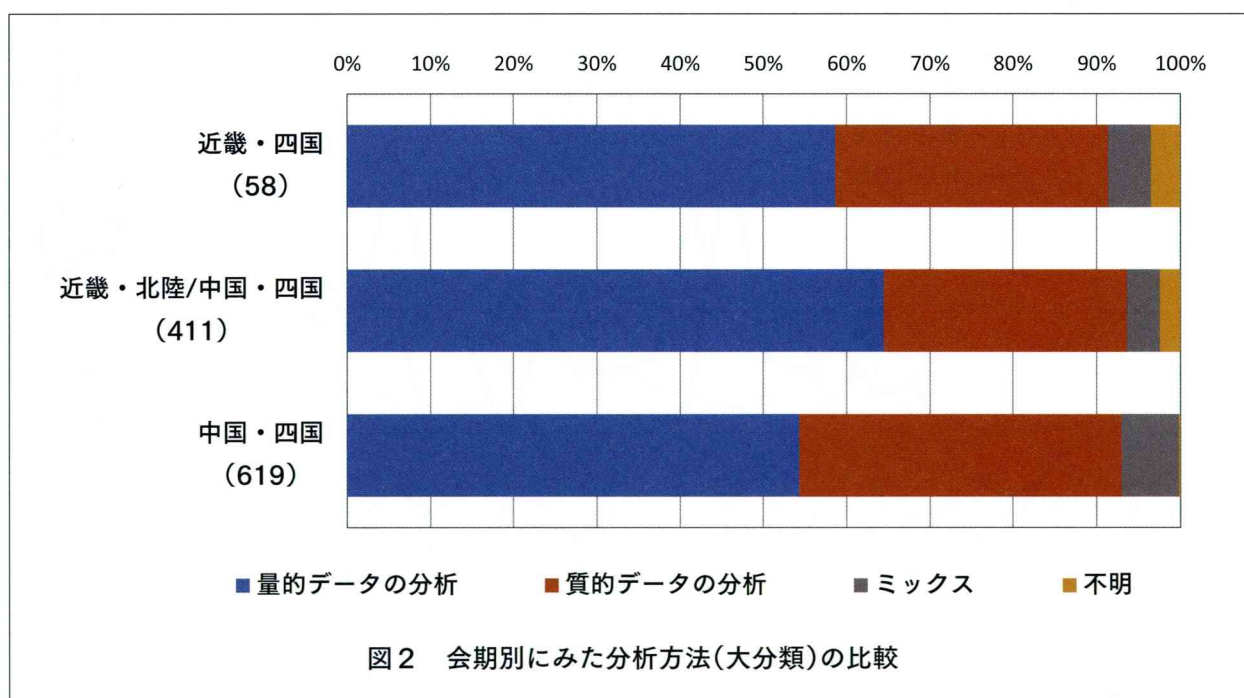
30回分の学術集会の総演題数は1,088件であり、C地区（近畿・四国）が58件、近畿・北陸/中国・四国が411件、中国・四国が619件であった。会員数に対する演題数の割合は、近畿・北陸/中国・四国地区の年度別平均3.5%から、中国・四国地区の年度別平均5.1%へと増加した。研究分野別演題数は多い順に「看護教育」364件（33%）、「看護技術」108件（10%）、「看護管理」104件（10%）で、残る5割弱が臨床看護に関する演題であった。臨床看護領域の内容は『ターミナルケア』『がん看護』『老人看護』『在宅看護』等多岐にわたるが、領域別の演題数の推移に一定の傾向はみられなかった。

2. 三会期別 研究対象者の比較（図1）



研究対象者の総計では、多い順に看護学生（33.7％）、看護職（23.2％）、患者・クライアント（21.9％）であったが、会期の進展とともに、患者、看護学生を対象とする研究が減少し、看護職対象の調査や文献研究が増加する傾向が伺えた。

3. 三会期別 分析方法（大分類）の比較（図2）



分析方法の総計では、量的分析（58.4％）、質的研究（34.8％）、ミックス法（5.6％）であった。会期の進展とともに、質的研究やミックス法による研究が微増傾向にあることが伺えた。

4. 三会期別 研究方法（詳細分類）の比較（図3）

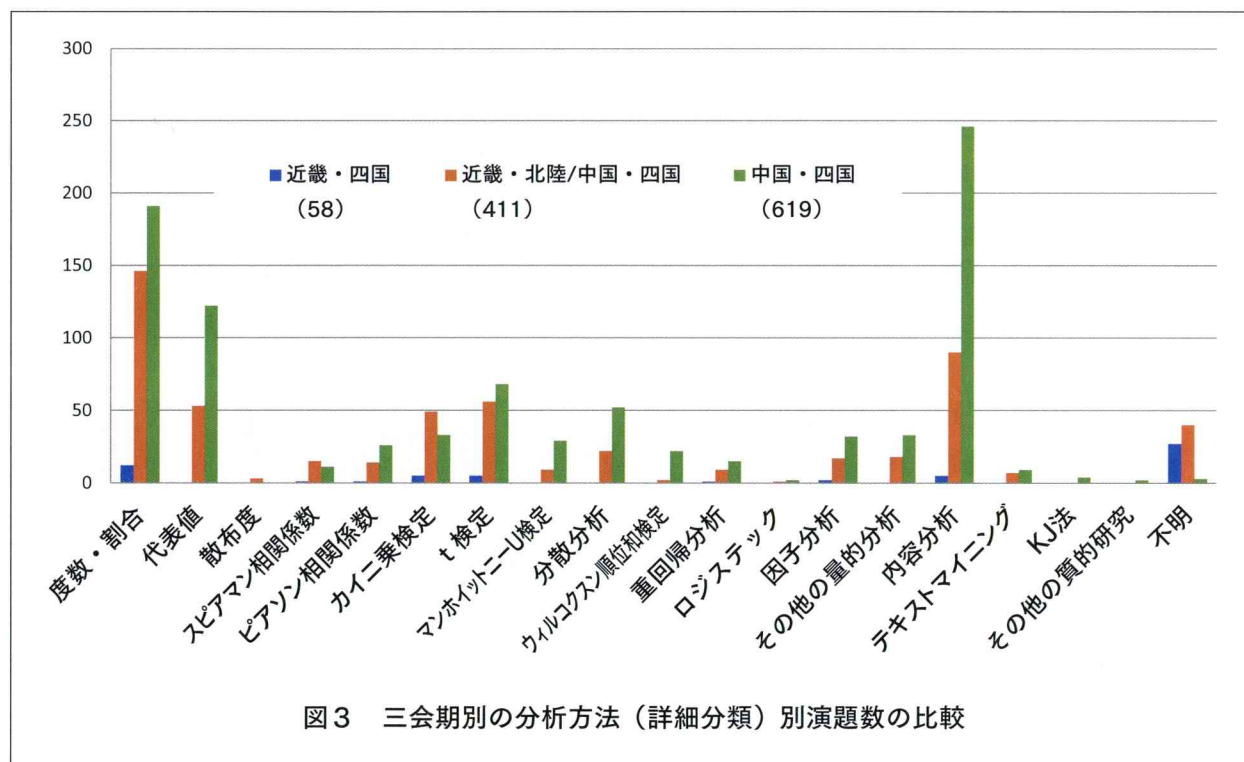


図3 三会期別の分析方法（詳細分類）別演題数の比較

会期の進展とともに演題数が蓄積されるのに伴い、量的研究においては、より複雑な統計処理方法が用いられるようになってきていることが伺える。一方、質的研究数は増加しているものの、分析方法の記載は不明瞭なケースが多く、具体的な分析手法を明示してある研究は少なかった。

5. 筆頭著者の所属別演題数の変遷（図4）

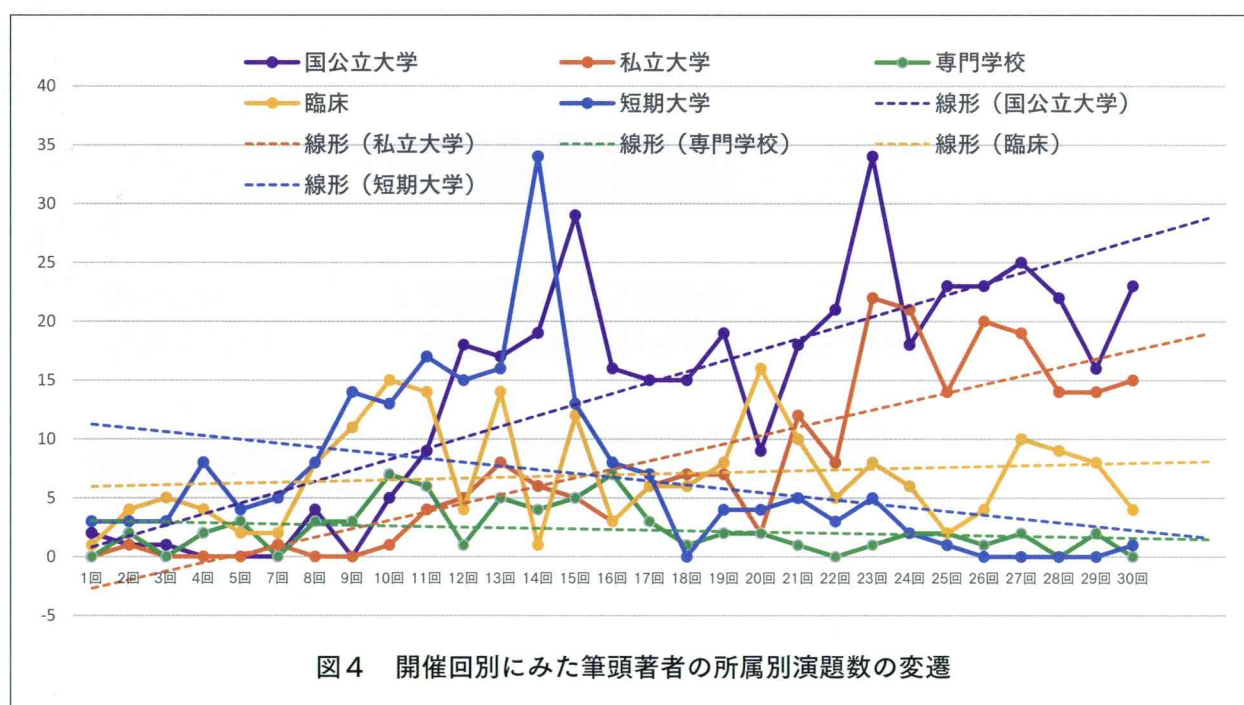
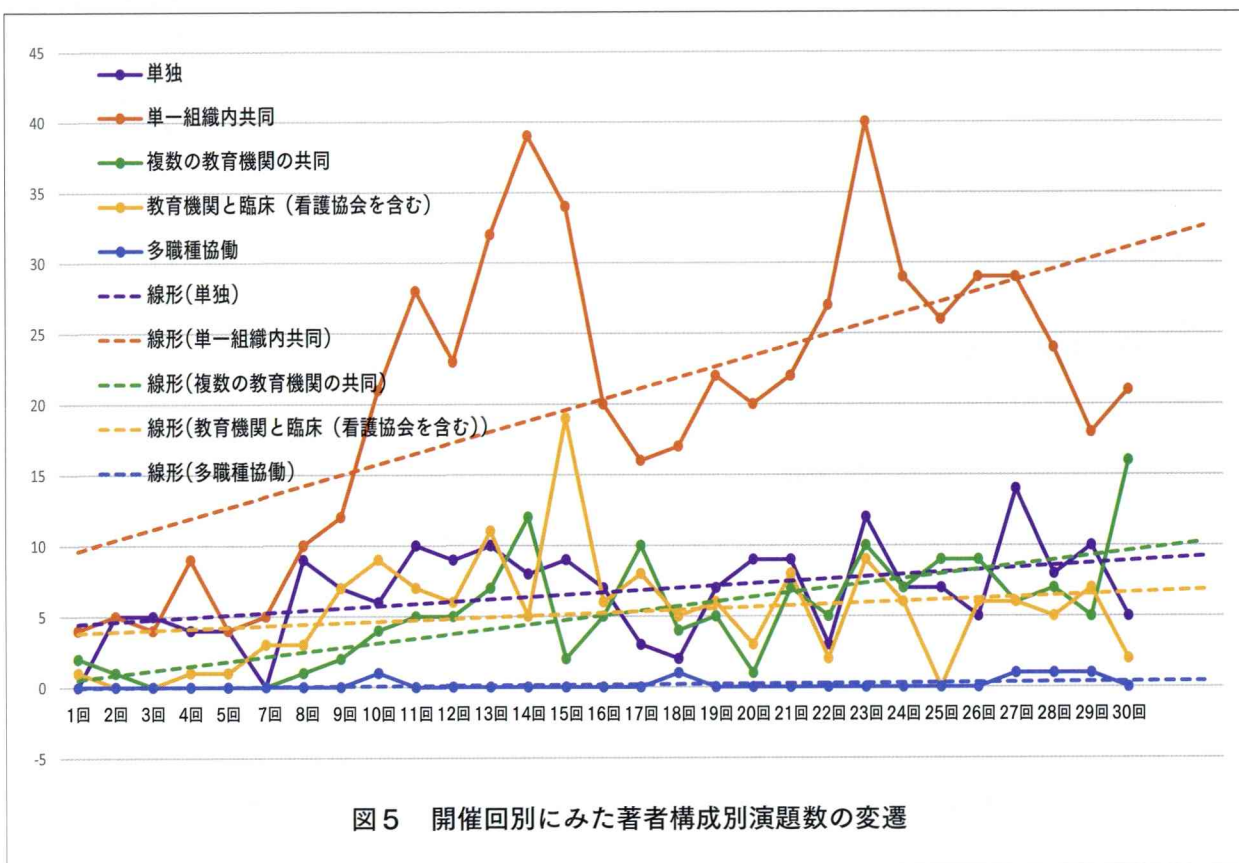


図4 開催回別にみた筆頭著者の所属別演題数の変遷

筆頭著者の推移は、当初は短期大学が大半であったものが徐々に減少し、相まって国立大学や私立大学が徐々に増加し、第10回（1995年）で逆転した。筆頭著者が臨床及び専門学校の演題数は横ばいである。

6. 著者構成別演題数の変遷（図5）



著者構成別の演題数の総計割合は、多い順に、単一組織（54.2%）、単独（17.8%）、教育機関と臨床との共同（14.0%）、複数の教育機関との共同（13.5%）、多職種との共同（0.5%）で、単一組織内の共同研究数、及び、複数の教育機関との共同研究数は増加、教育機関と臨床との共同研究数は微増する傾向が見られた。

【考察】

地方会開設以降の学術集会発表演題を分析した結果、地区割り再編成後も演題数が増加し、また、研究分野の多様性も広がっていることが示された。これは、地方会会員が日々の臨床看護や看護教育の実践の中に研究課題を見出し、研究に取り組んでいることが反映された結果と考える。また、会員の増加もその流れを加速させているものと推測される。一方、専門分野ごとの演題数の増減にはばらつきがあり、分野別の十分なエビデンスを提示するには至っていない。また、臨床と教育機関との共同研究が増加する傾向は示されなかった。よって、地方会が地方からの看護学の創世と発信を目指して更に発展するためには、特に臨床看護分野の研究を共同で推進していく必要性が示唆された。

【結論】

地方会開設以降の学術集会発表演題を分析した結果、地区割り再編成後も演題数が増加し、また、研究分野の多様性も広がっていることが示された。

演題：『30年の軌跡の上に看護に於ける研究の未来を展望する』



講師

深 井 喜代子

（岡山大学大学院保健学研究科）

日本看護研究学会に入会させていただいて27年になります。看護学研究者のお仲間に入れていただく以前、私どもは神経生理学者でした。高知女子大学で看護学を学び、東海大学病院で看護職を勤めたのち、1993年度から看護学領域で教育と研究に携わる身となりました。動物実験を行って、電気生理学的手法を用いて中枢神経系のメカニズムを解析する生理学と、「個性ある、生活し、痛みや苦痛、健康問題を抱える人間」に焦点を充てる看護学との間には実に大きな隔たりがありましたが、日本看護研究学会には、そのような背景の私どもを抵抗なく受け入れる大きな器があったように思います。その意味で、この学会はすでに学問としての自立性を備えていたのかもしれませんが、そして、私どもにとってこの学会がさらに馴染みやすかったのには、「地方会を持っている」という、既成の学問領域の老舗学会の象徴的な特徴があったことも原因していたと思います。入会後は看護学教育の怒濤のような大学化が進み、学会（学術団体）が何倍にも何十倍にも増えましたが、「地方会」を持つ看護学系の学術団体は今なお希有なのであります。

会員となって数年、まだ痛み関連の基礎研究の成果を発表したばかりの私どもは、看護学の歴史も、大系も、教育すらもよく分かっていない未熟な存在でしたが、複雑な要素の塊で、真理を探究することがさぶる困難なヒトを対象とした研究に大きな可能性があるように思えました。つまり、看護と看護学研究はこの先、めざましい進化・発展を遂げる領域（研究シーズの宝庫）だと予感したのです。

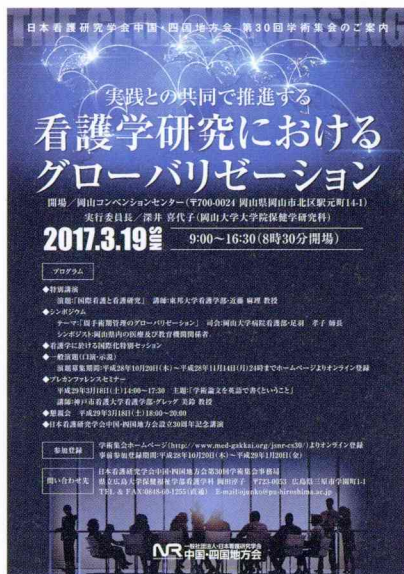
私どもが入会した当初は、まだ近畿・北陸／中国・四国の名を冠した地方会で、野島良子先生や近田敬子先生のようなカリスマ的存在が親学会の理事を務められ、地方会をリードしてくださいました。地方会とは言え、私のような若輩者に学術集会を託されたことから分かるように、当時の地方会には若手を育てよう、伸ばそうという気運の高まりが感じられました。特に役員会（当時は世話人会と呼んでいました）には伝統的な団結性があり、家族のような全身体制で地方会活動・学術集会が運営されていました。

1998年に第11回地方会を仰せつかり、19年後の今年、第30回地方会は自らの意思で主催させていただいております。地方会会員の皆様、そして看護の実践・教育・研究に携わるすべての方々、さらには看護の発展に関心と期待をお寄せくださる皆様とともに、地方会のこれからのあり方、さらには「地方会」からみた我が国の看護学研究のこれからの、しばし想いを巡らすことに致そうではありませんか。我が日本看護研究学会中国・四国地方会に感謝の意を捧げさせていただくとともに、本地方会のさらなる発展を願ってやみません。

【日本看護研究学会会員歴】

- ・1990年3月入会
- ・1998年3月29日 日本看護研究学会近畿・北陸／中国・四国地方会第11回学術集会実行委員長
- ・2001年4月～2007年3月 理事・地方会運営委員長（2期）
- ・2010年8月～2014年8月 理事（2期）
- ・2017年3月19日 日本看護研究学会中国・四国地方会第30回学術集会実行委員長

第30回 記念大会の 様子



第30回記念大会実行委員長 深井喜代子教授が語る地方会の歴史と意味



東邦大学看護学部 近藤麻理教授による特別講演「国際看護と看護研究」



シンポジウム
「周手術期管理のグローバル化」
シンポジストの岡山県内の医療および教育機関の関係者の
方々



フロアとの意見交換



前日に開催したプレカンファレンスセミナー
「学术论文を英語で書くということ」
講師 神戸市看護大学看護学部教授
グレッグ美鈴先生
多くの若手研究者が学びを得ました。



懇親会では、美味しい岡山の名産をいただき、翌日の英気を養いました。

これまでの地方会活動のあれこれ



第4回NEW看護学セミナー（京都）
ミネソタ大学看護学部 Mariah Snyder先生、Elen Eagan先生を招聘



グループ討議の様子



分離独立活動に向けて－最後の合同懇親会



C地区地方会初代代表 早川和生先生がシンポジスト



日本看護研究学会名誉会員 野島良子先生とともに



坊っちゃん、マドンナの衣装で参加者をお迎えできるのも
地方会ならではの企画（愛媛）



愛媛県では蛇口をひねるとみかんジュースが出る？
都市伝説は真実でした。

歴代代表者他役員と事務局

時期	年 度	代 表 (副代表)	事務局庶務 会 計	会計監事	事務局設置場所
(近畿・四国) C地区	1985～1991	早川 和生	玄田 公子 筒井 裕子	秋吉 博登 瀬尾クニ子	滋賀県立短期大学内
	1992	早川 和生	泊 祐子 宇都宮栄子	秋吉 博登 瀬尾クニ子	滋賀県立短期大学内
近畿・北陸 ／中国・四国	1993～1994	野島 良子	中西 純子 陶山 啓子	道重 文子 猪下 光	愛媛県立医療技術短期大学内
	1995～1996	野島 良子	中西 純子 岡田ルリ子	道重 文子 猪下 光	愛媛県立医療技術短期大学内
	1997～1998	野島 良子	中西 純子 中平 洋子	道重 文子 猪下 光	愛媛県立医療技術短期大学内
	1999～2000	安酸 史子	中西 純子 上杉 純美	深井喜代子 張替 直美	愛媛県立医療技術短期大学内
	2001*	安酸 史子 深井喜代子	中西 純子 上杉 純美	田中 清美 張替 直美	愛媛県立医療技術短期大学内
中国・四国	2002～2003	深井喜代子	中西 純子 上杉 純美	田中 清美 張替 直美	愛媛県立医療技術短期大学内
	2004～2006	深井喜代子	池田 敏子 佐藤 美恵	近藤 裕子 横手 芳恵	岡山大学医学部保健学科内
	2007～2009	宮腰由紀子 (川西千恵美)	藤井 宝恵 高瀬美由紀	上岡 澄子 関戸 啓子	広島大学大学院保健学研究科内
	2010～2013	山勢 博彰	立野 淳子 田戸 朝美	内田宏美(2010) 藤田 晶子 長田 京子	山口大学医学部保健学科内
	2014～2015	大森美津子 (中西 純子) (2015)	西村 美穂⇒ 政岡 敦子 南 妙子(2015)	内田 宏美 深田 美香	香川大学医学部看護学科内
	2016～	内田 宏美 (中西 純子)	福岡 美紀 深田 美香	越智 百枝 吉永 純子	島根大学医学部看護学科内

※代表の任期を本学会の役員改正時期と合わせるため移行期間として半年のみ2人体制をとる。

中国・四国地方会の始まりの頃：成功と失敗の思い出



初代表当時

初代表（1993～1998）

第5回学術集会実行委員長

日本看護研究学会名誉会員

野 島 良 子

C地区地方会から近畿・北陸地方会と中国・四国地方会が分離設立され、中国・四国地方会の世話人代表を委ねられた時、この新しい地方会の運営について、私には大きな迷いがありました。C地区地方会は有志会員のなかから自発的に生まれてきた組織。一方、中国・四国地方会は日本看護研究学会全体の会員増がもたらした組織再編によって構成された組織です。会員の多くは、それまで、日本看護研究学会の前身である四大学看護学研究会には、あまり馴染みがなかったはずです。この地方会がどのように運営されたならば、四大学看護学研究会が大切にしてきた看護研究についての基本的な考え方を、新しい地方会の会員共通の理念とすることができるのか？ この地方会がどのように運営されたならば、若い研究者が伸び伸びと育ってゆくのか？ そして、親学会のミニ版ではなく、この地域固有の文化を反映した看護研究の風土の形成につながっていくのか？ 当時、すでに短期大学で教育をうけた若い看護師たちが増えてきていました。そして、良い看護実践を支えるのは看護研究だという認識も、広く浸透していたように思います。しかし、日々の看護ケアを医師の指示のもとに行うことに慣れてきていた看護師たちにとって、研究に一番必要なものは自由で自立した精神であるということ—誰かから指示されてではなく、自分自身の内に生じてきた疑問を育て、教えられてきた通説に疑問をいれながら、自分の目で問題を見つめ直してゆくところの自立した精神なのだという自覚は、まだ、希薄であるように思われました。

迷った末、一つだけ心に決めたことがあります。それは、C地区地方会に漲っていた自由な空気をここにもとり入れていこうということです。まず、組織の運営に自由な空気を漲らせる。会員同士、年齢や、職場での職階から自由になり、地方会では看護研究に携わる者同士として、皆、対等であろうという考えです。世話人会議には自分の意志で自由に参加し、自由に席をとり、自由に発言する。役割を固定化しない。その日出席している人が世話人になって、会の運営を担うという方法をとりました。この運営方法は間違っていなかったように思います。というのは、1993年にC地区地方会が近畿・北陸地方会と中国・四国地方会とに分離してから2002年3月まで、両地区は地方会とNEW看護学セミナーを交互に担当し合いながら開催してきましたので、こうした機会と相まって、C地区地方会に浸透していた自由な雰囲気、中国・四国地方会にも自然に広がっていったように思います。

NEW看護学セミナーを地方会分離後も両地区が交互に開催し続けたことが、新しい地方会の活動に与えた影響も決して小さくはなかったと思います。NEW看護学セミナーは、新しく分離独立した地方会に遊び心を持ち込んでくれたように思います。多くの若い会員はNEW看護学セミナーから、考える行為としての研究活動には、そこに遊びの要素も含まれており、自由で伸びやかな精神が不可欠だということに、次第に気づいていったのではないのでしょうか。こうした変化は、その後の地方会学術集会で発表された多くの研究テーマの推移のなかにみることができます。

さて、ここまでは、中国・四国地方会の草創期の活動について、いくらか評価できる部分です。しかし、こうした始まり方は直ぐに困った問題に直面することになりました。どのような組織にも、始

まりがあります。初め、志を同じくする何人かが集まって、これから作ろうとする組織の意義や目的を確かめあい、為すべき必要な仕事にそれぞれ担当者を振り当て、組織をこのように運営していこうという目途をつける。そして、ここでの話し合いの結果を文字にして、規約を作る。そしてそれに則って組織が目的に向かって動き始める。この作業は同じ志で結ばれた仲間同士の間で理想や希望や念願が活き活きと交換されるわけですから、気楽で楽しいように思われますが、往々にして、かなり堅苦しく、融通のきかないものになりがちです。いったん規約が出来上がると、なによりもそれが先行し、それに縛られてしまいがちになるからです。こうした、正統的な発足の形に比べると、中国・四国地方会の始まり方は、いささかのんびりとしたものであったかもしれません。しかし、この緩やかな運営方法は、新しく創設された看護研究者の小規模な学術団体を、硬直した組織に陥ることから防いだと思います。が、その後の運営の過程で他の困難につながってしまいました。世話人の規定がないために、事務局が名簿の管理をどうしてよいかわからないという問題が持ち上がったのです。中国・四国地方会は、分離独立時はともかく、その後、会員数が増加していたからです。会員数がただ増加していたというだけではなく、実は、急速に増加していたのです。中国・四国地方会だけで2000年度には550名に、翌年には600名に達していました。会員数がこれだけ多くなりますと、もはや役割を固定しないで、当日出席した会員が世話人になって、ボランティア的に運営していくことではいろいろな支障が生じてきます。また、一貫した学会運営をしていくためには、世話人の役割分担と活動とに固定性と持続性が、どうしても必要です。こうした問題があがってきたことを受けて、世話人は2回続けて連絡なく欠席すれば、世話人名簿からははずすことになりました。地方会の規約がきちんと整備されたのは、もっと後に、世話人代表が交代してからです。

中国・四国地方会が30周年を迎える日がくる。まるで夢をみているようです。発足当時、30年後の地方会のこの盛況を、誰が夢見、予想したのでしょうか。この継続的な発展を可能にした大きな要因の一つとして、90年代以降の看護系大学と大学院の増加ということがあげられるでしょう。しかし、地方会の運営レベルで考えると、事務局を担当された各大学の先生方の貢献を抜きにしては考えられません。とりわけ最初の事務局を引き受けてくださった愛媛県立医療技術短期大学（現・愛媛県立医療技術大学）の中西純子先生が地方会に関する諸資料を丁寧に保存しておいて下さったおかげで、地方会の30年、とりわけ、今見てきたように、幾らか曖昧であった初期の活動内容を一つの軌跡として記録に残すことができたように思います。

議事録や学術集会プログラムはいうに及ばず、学術集会の案内やニュース・レター等は、苦心して作成されたものであっても、一旦読まれると大抵は散逸してしまうものです。地方会の活動は、こうした文書が目に見え、語り継がれる価値のある資料として保存されてこそ、歴史として形成されてゆきます。眼目を自由な精神の確保におくあまり、のんびりした運営に陥り、地方会活動に関する諸資料の保存という大事な仕事を、つい忘れてしまっていた世話人代表に代わって遂行してくださっていたおかげで、中国・四国地方会は最初の30年の活動の蓄積を目に見える形で残すことができました。そしてそれを踏まえて、次の30年に向けて、次ぎの一步を踏みだしてゆくことができるように思います。

日本看護研究学会の設立時の目的は、若い看護研究者を育てることにありました。この目的は、ここ十数年の間に、ほぼ達成されてきたといえるでしょう。しかし、これからの目標となると、どうでしょうか。昨今、わが国の科学者や研究者が置かれている状況は余りにも厳しいものです。看護も例外ではありません。そのために目先の評価に気を奪われ、看護研究者の目が短期間でまとまりやすい課題や問題にばかり向きがちです。看護を本当に必要としている人々の日々の暮らしをじっくりと見つめ、腰を据えて研究に取り組むことのできる若い看護研究者たちが育ってこなければなりません。そのために、地方会は何かできるのではないのでしょうか。これからの大きな課題です。

30周年に寄せて



第2代代表（1999～2001）

防衛医科大学校医学教育部看護学科

安 酸 史 子

日本看護研究学会中国・四国地方会設立30周年記念おめでとうございます。私は平成5年に岡山県立大学保健福祉学部看護学科に赴任して以来、10年間中国・四国地方会に所属していました。その間、平成11年からは3年間世話人代表をさせていただきました。世話人代表に選出された時は、まだ年齢的にも40歳そこそこで教授になりたてでしたし、時期が早すぎるし、代表をするような器ではないと、しばらくじたばたしたのを覚えています。前世話人代表の野島良子先生から、選出されたのだから引き受けなさいと電話で説得されてお受けしましたが、恐れ多くて身のすくむ思いでした。地方会事務局を担当してくださっていた中西純子先生がきめ細かな作業をしてくださったので、何とか務め終えたという状態でした。当時、県の教員養成課程で看護研究の指導をさせていただいて、その発表の場として地方会と本学会を活用させていただいていました。臨床の方々も会員になり易く、気軽に参加でき、かつ内容的にはアカデミックな意見が交換し合える学会として、研究指導した看護師や先生方と学会で発表しながら、私自身指導者として育てていただいたと感謝しております。その当時研究指導した看護師や先生たちとは今でも時々集まるくらい親密な関係を維持しています。今回、30周年記念と聞いてその足跡の一端を担わせていただいたのかと感慨ひとしおです。今後のより一層の発展を願ってやみません。

設立30周年に寄せて



第3代代表（2001～2006）

第11回・30回学術集会実行委員長

岡山大学大学院保健学研究科

深 井 喜代子

日本看護研究学会に入会させていただいて27年になります。他の学問領域から看護学界へ身を転じた私どもにとって、看護学系の老舗学会日本看護研究学会が「地方会を持っている」ことは大きな救いでした。私どもが入会した当初は、まだ近畿・北陸／中国・四国の名を冠した地方会で、野島良子先生や近田敬子先生のようなカリスマ的存在が親学会の理事を務められ、地方会をリードしてくださいました。私のような若輩者に学術集會を託されたことから分かるように、当時の地方会には若手を育てよう、伸ばそうという気運の高まりが感じられました。特に役員会（当時は世話人会と呼んでいました）には伝統的な団結性があり、家族のような全員体制で地方会活動・学術集會が運営されていました。

1998年に第11回地方会学術集會を仰せつかり、19年を経た第30回地方会は自らの意思で主催させていただきました。30周年を迎えた現在、皆様にとってこの地方会の意味は何でしょうか。会員の皆様、看護の実践・教育・研究に携わるすべての方々、さらには看護の発展に関心と期待をお寄せくださる皆様に問いかけたいと思います。この30周年の区切りが、温故知新を体感しつつ、地方会の魅力が「会員一人ひとりが魅力あるローカルアカデミックフォーラムを創造していくこと」にあったことを再確認する好機となることを期待します。我が日本看護研究学会中国・四国地方会に感謝の意を捧げさせていただくとともに、本地方会のさらなる発展を願ってやみません。

中国・四国地方会の歩みに加わって



第4代代表（2007～2009）

第25回学術集会実行委員長

広島大学名誉教授

宮 腰 由紀子

平成12年4月1日付け広島大学着任以来、地方会活動に関わらせて頂いております。

これまでで印象深かった集会の一つは、第17回学術集会（実行委員長：鳥取大学 宮脇先生）です。中国・四国地方会に分離独立して最初の集会でしたが、当日朝に随分と静かだと思い外を見たら、3月にもかかわらず一面の銀世界！ 集会時に御挨拶頂いた医学部長が、「着任以来10年間で最も遅く深い積雪で驚いた」と興奮気味に思わず仰言られたほどでした。雪は、参加者皆様の篤いお気持ちにより、午後にはスッカリ消失しておりましたが、それもまた思い出深くしている一因だと存じます。

さて、当地方会の強みは、2つ有ると感じています。一つは、近畿北陸地方会との合同時から引き続いていると思われませんが、中西先生や深井先生をはじめ運営委員会および学術委員会の委員の皆さまが地方会活動についてとても熱心に意見を交わし、地方会の皆さまにとって有用な課題の探索を真摯に行なっていることです。もう一つは、委員をはじめ、会員の皆さまの強力な協同力や実行力を惜しみなく地方会活動に提供くださることです。毎年の学術集会は勿論ですが、全国学術集会の開催にあたって、地方会会員の皆さまの精力的なご支援のお陰で、盛会のうちに行なえ得たのです。かく申す私も、僭越ながら第25回の地方会学術集会の実行委員長と、第41回の全国学術集会会長を、光栄なことに務めさせていただきましたが、それぞれ大過なく無事に行なえましたことは、会員の皆さまのご尽力のお陰と感謝しております。本紙面をお借りして改めて御礼を申し上げます。

とは申しまして、当地方会の課題も2つあります。一つは、この活発な地方会活動を維持し発展させるためには、どのような方策で臨めばよいのか、ということです。大学における教員数の減少とそれに伴う研究費等の削減は、校務以外の活動への余力を産み出しにくい事態を招いており、地方会活動とくに事務局や学術集会を担う委員や個人または教室が背負う負担は大きいものがあります。もう一つは、新規会員がそのまま会員を継続できるような魅力ある活動創出への方策をどのように行なえばよいのか、ということです。たゆまぬ努力が必要ではありますが、会員お一人お一人が自然と巻き込まれてしまうような、生き生きとした魅力溢れる研究等の活動実践の創出の検討が必要かと思います。

いみじくも当方が運営委員として関わらせていただいた時期は、国家政策方針の大規模な変更により、大学も学会も法人化が推進された時期であり、そのための対応に追われていました。その流れの中で、当地方会では、会計処理の見直しを皆さまと共に行なってまいりました。その折に誕生した将来事業用経費積立てにより、このたびの記念事業が行なえることを有難く存じます。

今後は、国際化と地域連携活動が求められておりますが、これまでの実績を基盤として、当地方会がますます御隆盛となられることを、心から信じております。

最後に皆さまの益々の御活躍と御多幸を祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます。

30周年に寄せて



第5代代表（2010～2013）

第22回学術集会実行委員長

山口大学大学院医学系研究科

山 勢 博 彰

私は、平成21年3月に開催した第22回地方会学術集会の実行委員長を務めました。学内での開催で、予算も限られていたことから、外部業者への委託は一切無い状況で準備と運営を行いました。幸い、多くの参加者とボランティアスタッフに恵まれ、滞りなく開催することができました。その時感じたのは、ここに集った人たちの看護研究に対する熱い思いでした。その気持ちに支えられての学術集会だったと思っています。

翌年からの4年間は、運営委員長を務めました。非常に大きな学会の地方会ですので、運営上の責任の重さを痛感していました。拝命当初は、事務局の整備、会議の調整と開催、学術集会のサポート、ホームページ更新などの作業に振り回されていた記憶がありますが、1年を過ぎた頃には気持ちの余裕が出てきたようです。

運営委員長を務めていた期間中には、東日本大震災が発生し、日本看護研究学会は何ができるのか、地方会の責任者として思索することもありました。また、研究倫理審査の必要性が高まり、より良い研究をサポートする審査について思いめぐらすこともありました。さらに、臨床と研究をつなぐ看護研究について検討する機会も持ちました。こうしたテーマは、看護研究学会のさまざまな活動を通して思いを深めていくことができました。

学術集会実行委員長として、地方会運営委員長として、多くの会員の看護研究を通じた熱意や温かい気持ちを肌で感じ、サポートをしてもらったと振り返っています。地方会のこれまでの30年は、こうした会員ひとり一人の支えで成り立ってきたことを改めて実感しています。これからも、多くの人に支えられて前進する中国・四国地方会であることを祈念しています。

共にあり、創り生み出す中国・四国地方会への想い



第6代代表（2014～2015）

香川大学自然生命科学系

大 森 美津子

一般社団法人日本看護研究学会中国・四国地方会におかれましては、30周年を迎え、誠におめでとうございます。会の創設への強い思いをもって、並々ならぬ力をそそがれた方々のおかげであると深く感謝致します。さらに、その思いを引き継ぎ、発展させた方々のおかげであると感謝致します。私もその恩恵を受けて、研究に近づき、親しませて頂きました。初めは、地方会は学ぶ場であり、大きな存在として感じ、遠く離れたものでした。発表し、他の研究者との触れ合いがあり、拡がりを得る場となりました。そして運営委員をさせていただき、2009年には、内藤直子実行委員長のもと、香川県で第22回 日本看護研究学会中国・四国地方会学術集会を開きました。その時に、宮腰運営委員長、運営委員の方々にお世話になり、中国・四国地方会の存在の重さを体験できました。

その中国・四国地方会に縁があって、2014年には運営委員長を、2015年には会長をさせていただきました。その間に、一般社団法人日本看護研究学会の会則の変更に伴い、役員の変更、選挙を行いました。宮腰由紀子先生、山勢博彰前運営委員長、中西純子理事、祖父江育子理事、運営委員の方々、事務局、会員の方々に支えて頂き、無事行うことができたと感謝しております。鳥根県と高知県で開催された学会も盛況で、多くの人々が参加して下さいまして、研究の初心者からベテランの方までのニーズにあった内容が提供できたことに感動しています。今、想いを強く持たれた方々が準備しつつある30周年の記念行事が、盛況に始まり終えることを確信し、祈っております。

最後に、看護への思いを書かせて頂きます。看護は人間にどう向かい、何を行うのでしょうか。人間は複雑で深遠な存在、考えて辿り着くのでしょうか。感じて辿り着くのでしょうか。続く震災に伴い、次元が変わる程、世界観は変化しています。看護は、この新たな世界に入る試練の時を迎えていると感じます。この会が創り出す場となり、生み出す場となることを、共にその場を共有しつつ、歩んでいきたいと思っております。

祝 日本看護研究学会 中国・四国地方会設立30周年



第17回学術集会実行委員長

慶應義塾大学 宮 脇 美保子

日本看護研究学会中国・四国地方会設立30周年にあたり、衷心よりお祝い申し上げます。

私は、地方会を近畿・北陸と中国・四国に分割した後、初めて開催した第17回学術集会（2004）の実行委員長を務めさせていただきました。「行動する看護職」をテーマに、加藤尚武先生に「行動する看護職への期待」と題した特別講演をお願い致しました。思いを込めたプログラムとともに、私が今も思い出すのは当日の大雪です。開催日の3月7日(日)は積雪があり、皆様にはお足元の悪い中ご参加いただくこととなりました。交通機関も遅延し、プログラム通りに進むのだろうかとハラハラいたしました。皆様のご協力により無事に終了することができました。私にとりましては、同年3月末で鳥取大学を退職したこともあり、春の雪とともに思い出深く心に残っております。最後に、中国・四国地方会30周年を新たな飛躍の出発点とし、益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

第18回学術集会の思い出



第18回学術集会実行委員長

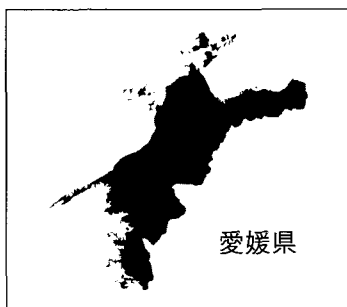
国際医療福祉大学大学院 岡 崎 美智子

学術集会のテーマは「臨床看護実践を支える看護学」でした。基調講演は在宅ホスピスケアの実践者である季羽倭文子先生を迎え「患者会と歩む看護者の役割」についてお話いただき、続いて3つの交流会

「がんと共に生きる人々を支援する看護学」「障害児を持つ親の会と共に成長する家族看護学」「エビデンスに基づいた臨床看護学」を企画し、患者と共に歩む看護実践活動の一端を参加者と共に語り合いました。折しも、島根医科大学と島根大学の統合直後で、看護学科棟も新しく建設され医学部看護学科の教員達の一致団結のもとに学術集会を開催しました。

当日は積雪で出雲市一面銀世界でした。にもかかわらず、看護学科棟は多数の参加者で熱気にあふれていました。その中に、野島良子先生が積雪の中を杖を片手に参加され、地方会の発展について熱く語られました。中国・四国地方会は自由闊達な気風を大切に、独自の発想で若手研究者の育成を目指しておられたからです。

第19回学術集会の思い出



第19回学術集会実行委員長

人間環境大学松山看護学部 河野保子

平成18年3月19日(日)に愛媛大学医学部看護学科棟で、中国・四国地方会第19回学術集会を開催いたしました。参加者188名で熱い議論が展開されました。学会テーマは「看護実践におけるエビデンスの確立をめざして」であり、特別講演は菱沼典子先生にお願いいたしました。当初、第19回の学術集会は、愛媛大学ではなく他大学が担当することになっていました。しかし諸事情により当該大学での開催が不可能となり、急きょ、一年早く、愛媛大学で学術集会を開催することになりました。準備期間が1年間あるかないう状況でしたが、関係者一同、力を合わせて運営に取り組みました。

その当時、地方会の運営委員長をしておられた深井喜代子先生からはとても感謝されました。この学術集会を通して、深井先生とは今日までお付き合いをさせていただいております。学会企画の取り持つ縁は大切ですね……。

最後に、中国・四国地方会の今後のご発展を祈念申し上げます。

第20回学術集会の思い出

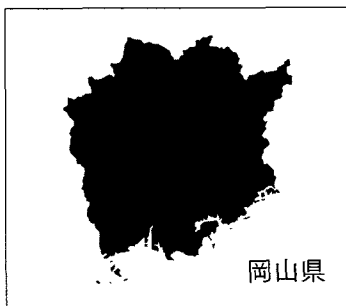


第20回学術集会実行委員長

高知学園短期大学 梶本市子

高知で初めて開催された学術集会は、平成19年3月4日高知医療センターを会場に、中国四国各地から260人の参加を得て行われました。当時は、めまぐるしい医療制度の変化に伴って地域医療連携の構築が急務になっており、その中の看護職の役割が課題となっていました。そこで、テーマを「看護実践における地域医療連携」とし、シンポジウム「ケアの継続と質の向上をめざした地域医療連携」では3人のシンポジストからパワフルな活動内容の報告と提言があり、目からうろこの数々に刺激を受けたことでした。一般演題、電子カルテシステムとオストミーケアの実演交流会のほか、特別セミナーなどどれも好評でした。学術集会の前日には、次回開催県の委員の皆様と交流会を持ち、高知のよさこい鳴子踊りを一緒に踊ったことなど、楽しかった場面が思い出されます。実行委員、準備委員、当日の協力員のパワーと笑顔に支えられた集会でした。

第21回学術集会の思い出



第21回学術集会実行委員長

森ノ宮医療大学保健医療学部看護学科 村上生美

中国・四国地方会設立30周年まことにめでとうございます。関係各位におかれましては、発展に向けて役割を発揮されておられることに衷心より敬意を表したく思います。

私は2008年、第21回学術集会を岡山県立大学において担当させていただきました。当時の抄録集を繰ってみますと『臨床における研究と基礎研究との融合』をメインテーマに、16題の口演と28題の示説、特別セミナー2件、西條剛央氏（日本学術振興会）による特別講演『構造構成主義とは何か』、引き続きシンポジウム『看護における「構造構成主義」の可能性』と過密なものでした。質的研究と量的研究をどのように繋げて看護の知にしていくなか？ そういった問題意識によって企画したように思います。抄録集の頁を辿ると当時のことが蘇ります。大学や病院からの実行委員や協力員の叡智の賜でできたことでした。また参加者の新たな知見を探究しようとする熱気も感じました。今後ますますのご発展を祈念しています。

「臨床からの“智”をつむぐ研究のウェーブ」の思い出



第23回学術集会実行委員長

人間環境大学大学院 看護学研究科 内藤直子

日本看護研究学会 中国・四国地方会30周年をお迎えられ心よりお慶びを申し上げます。当時、科学的な看護研究をめざし質的研究は、木下康二先生にM-GTAの特別講演、深堀浩樹先生に質的研究用

PCソフト・ATLAS.tiの特別セミナー、ワークショップはタブレットによるe-learning等を企画して、いずれも予想以上のご参加を得たことが思い出です。今勤務の大学院博士課程で混合研究法を指導するたびに「研究のウェーブ」が大波になったのだなあと、力強くつむがれ発展していると思われます。また、香川文化の「おもてなし」では“和三盆菓子やさぬきうどん”、懇親会では“サヌカイト演奏や乙女文楽の舞”で皆様と親睦できたのが懐かしいです。第23回学術集会企画・実行委員の大森先生、國方先生、越智先生や皆様の限りないご協力に改めまして感謝を申し上げます。

日本看護研究学会 中国・四国地方会がますますご発展されますようお祈りいたします。

第24回学術集会の思い出



第24回学術集会実行委員長

関西福祉大学 川 西 千恵美

第24回学術集会は「先ず隗より始めよ！看護研究 実践と研究をつなぐ」のテーマの下に徳島大学で開催しました。研究学会はもともと4大学看護学会から発展した学会で、その4大学のひとつであった徳島大学なので企画にはとても悩みました。ひとつ目は、本学会の名誉会員である野島良子先生に「地方会の歩みと看護研究」の特別セミナーを、もうひとつは、徳島大学ご出身の井上智子先生をお招きして「臨床の疑問を研究につなげるには」の特別講演を行なっていただきました。また、午後には、看護実践能力を向上するための交流会も企画し大変盛況でした。

第24回学術集会から発表ポスターの中から優秀賞の選出を始めましたが、表彰式に受賞者は不在だったため、その場で表彰できなかったことを良く覚えています。

徳島県のマスコットキャラクターのすだちくんを配置した学術集会の封筒を、ひとつ今でも大切に持っています。

第26回大会の思い出



第26回学術集会実行委員長

鳥取看護大学 前 田 隆 子

第26回大会は、2013年3月3日のひな祭りの日に鳥取県米子市にある鳥取大学医学部キャンパスで開催しました。テーマは「クリニカルクエスチョン、そして研究！」であり、特別講演には紙屋克子先生においでいただき、「実践と研究最前線～ベッドサイドが面白い～」を伺いました。そして学術委員会企画の公開“研究のスタートアップ支援”を実施していただくことが出来ました。217名の方にご参加いただき、にぎやかで、楽しい学会となりました。不慣れな実行委員長でしたが、学会役員の先生方、学内の諸先生のご尽力を賜り、何より所属教室内の諸姉が一丸となって協力いただき心から感謝しました。私事ですが、その数日後に充実した気持ちで最終講義をしたことを昨日のこのように思い出しています。

第27回学術集会の思い出



第27回学術集会実行委員長

愛媛県立医療技術大学 中西純子

愛媛県での開催は3回目、愛媛県立医療技術大学を会場に開催するのは短期大学時代の第8回に続く2回目でした。当日の発表演題数は56題、一般参加者数は366名、実行委員・ボランティアを含めると459名と多くの方が参加してくださいました。学会の運営は今では専門業者に委託して行うのが通常となっていますが、少額予算で行う地方会学術集会は何もかもが手作りで、第27回もお金をかけないで、しかし、参加者が“来て良かった”と感じていただける温かい学術集会にしようと趣向を凝らしました。愛媛県観光課のご厚意により蛇口からみかんジュースがでるというサービスを提供したのもその一つでした。企画から当日の運営は私が当時所属していた講座の教員たち7名が中心となりチームを組みましたが、本務と並行する忙しい中でも作り上げていく楽しさがあり、地方会学術集会の運営は手作りであるが故に、多忙さを超えるメリットが大きいと実感する学術集会でした。

日本看護研究学会中国・四国地方会第28回学術集会の思い出



第28回学術集会実行委員長

島根県立大学看護学部 吉川洋子

第28回学術集会を約200名の参加により平成27年3月8日、島根県立大学出雲キャンパスにおいて開催しました。

集会は「実践と研究で創造する“看護の知”」をテーマに、44題の一般発表、2本の講演、特別セミナーで構成し、円滑な進行と活発な議論を願いました。

学術講演では、筒井真優美先生に「アクションリサーチ」の研究デザインについて事例をまじえて話していただき、会場から質問も多く出、理解を深めることができました。特別講演ではラフカディオ・ハーンの曾孫である小泉凡先生によるハーンが現代に残した「五感力」について、特別セミナーでは「質的研究における文献の読み方」と興味深い内容で、参加者からも良い反応を得ました。

実行委員会の立ち上げから約1年半、気持ちよく動いてくれた実行委員の協力のお陰で計画に沿って順調に進めることができました。また当日は、スタッフや学生の対応にお褒めの言葉を多く頂戴することができ、大変嬉しく思いました。

第29回学術集会の思い出



第29回学術集会実行委員長

元高知大学 坂本 雅代

地方会設立30周年おめでとうございます。1年1年の積み重ねにより大きな節目を迎えられましたこと、皆様のご努力・ご支援の賜物と感謝申し上げます。

その伝統ある地方会の第29回学術集会を、高知県（高知大学）で「より良い看護実践への探求－臨床における看護研究－」のテーマの下開催をさせて頂きました。地方会の目的に沿いつつ高知で頑張る看護職の皆様にも多くご参加頂ければと、学術集会に向け内容を検討し、委員の持てる力を発揮しつつ準備を進めて参りました。学術集会当日は、多くの皆様にご参加頂き、真剣かつ生き生きとしたお姿を目に致しました。その中には、これから看護を志す看護学生も含まれており、学術集会の雰囲気や看護研究について何かを学び取って頂けたのではないかと存じます。

医療や看護の専門性が問われる時代にあって、より質の高い看護が求められています。今後益々地方会並びに看護研究が発展していきますように祈念しております。

多くの学生ボランティアを含むスタッフの力で作り上げる地方会



年 度	地 方 会 活 動
1985年度	C地区（近畿・四国）地方会設立準備スタート（1985.9.8） 本学会よりC地区（近畿・四国）地方会の設立を許可される（1986.3.10） 世話人代表：早川和生氏 事務局：滋賀県立短期大学内 玄田公子氏 第1回学術集会（京都） 近田敬子実行委員長（1986.3.16） 一般演題数 7題
1986年度	第2回学術集会（京都） 早川和生実行委員長
1987年度	第3回学術集会（徳島） 秋吉博登実行委員長
1988年度	第1回NEW看護学セミナー 早川和生プランナー テーマ：「看護研究の立案からパソコンによるデータ処理まで」 第4回学術集会（神戸） 森田チエコ実行委員長（1989.3.26）
1989年度	世話人代表選挙で早川和生氏が選出され引き続き代表を務める 第2回NEW看護学セミナー 野島良子プランナー テーマ：「看護診断を診断しよう！」 Snyder博士による「看護診断の現在・過去・未来」他 第5回学術集会（徳島） 野島良子実行委員長 * 車椅子の滝野澤直子さんが一般演題で口演 「看護婦をしていたときには気づかなかったこと」 これをきっかけに、1992年から看護学雑誌に「直子の車椅子奮戦記」連載開始
1990年度	日本看護研究学会第16回学術集会（京都） 学術集会長をC地区世話人代表の玄田公子氏が務めたため、地方会独自の学術集会は休会としC地区で本学会を応援。 招聘講演のカリスタ・ロイ氏の来日を記念し、地方会前日企画で「カリスタ・ロイ博士記念シンポジウム」開催このときの収益金が「ロイ基金」となる。 第3回NEW看護学セミナー 近田敬子プランナー テーマ：「患者さんの体験をいかに研究へ」 滝野澤直子さんを招いて…
1991年度	第4回NEW看護学セミナー 宮島朝子・近澤範子プランナー テーマ：「看護技術の再発見ータッチングとは」 第6回学術集会（神戸） 西田恭仁子実行委員長
1992年度	第5回NEW看護学セミナー 新道幸恵プランナー テーマ：「タッチⅡ」 第7回学術集会（滋賀） 坂井靖子実行委員長（1993.3.28） 任期満了に伴い世話人代表選挙が行われ早川和生氏が再選される。
1993年度	本学会の地区分け変更により、C地区地方会を近畿・北陸地方会、中国・四国地方会に分離、再組織する。しかし、地方会活動は、当分の間、合同で開催することし、学術集会とNEW看護学セミナーを両地方会で交互に担当することとなる。 選挙により、近畿・北陸地方会は近田敬子氏が代表に、事務局は引き続き泊氏が担当。中国・四国地方会は野島良子氏が代表に。事務局は新たに愛媛県立医療技術短期大学内に設置、中西純子氏が担当となる。両地方会合同で初の近畿・北陸地方会／中国・四国地方会 第8回学術集会（愛媛）開催 岡部喜代子実行委員長（1994.3.27）
1994年度	第6回NEW看護学セミナー（広島）野島良子プランナー テーマ：「タッチⅢ “看護診断と治療”」 第9回学術集会（京都） 門田邦代実行委員長（1995.3.26）
1995年度	中国・四国地方会、ニューズ・レター発行開始 第10回学術集会（富山） 神郡博実行委員長（1996.3.24） これまで学会終了後に開催していた懇親会を前日の世話人会後に開催するようになる。
1996年度	世話人代表選挙にて、近田敬子、野島良子代表が各々再選される。 日本看護研究学会第22回学術集会長（広島）を中国・四国地方会世話人代表の野島良子氏が務めるため、地方会学術集会は休会とし、両地方会で本学会開催を応援した（131名の地方会会員と4名の非会員が実行委員として協力）。 野村美千江氏、西田直子氏をプランナーに、本学会前日にプレセッション企画として「縦断的研究の方法を学ぼう！」を開催。本学会の招聘講演講師Frost博士にも講演いただく。

1997年度	第7回NEW看護学セミナー 川口孝泰プランナー テーマ：「健康回復力を高める病室・病棟環境の創造」 第11回学術集会（倉敷） 深井喜代子実行委員長（1998.3.29） 補助金が近畿・北陸地方会は会員数500名を超えるため10万円に。中国・四国地方会は487名で従来どおり5万円。
1998年度	第8回NEW看護学セミナー 安酸史子プランナー テーマ：「ヘルスプロモーションと健康教育」 第12回学術集会（滋賀） 泊祐子実行委員長（1999.3.28）
1999年度	世話人代表選挙にて川口孝泰氏（近畿・北陸地方会）、安酸史子氏（中国・四国地方会）が代表に選出される補助金が近畿・北陸地方会は601名を越え20万円に、中国・四国地方会は500名をわずかに越え、15万円に増額される。 近畿・北陸地方会、ニュース・レターの発行開始 第9回NEW看護学セミナー 近田敬子プランナー テーマ：「なぜ？からはじまる看護」 第13回学術集会（山口） 野口多恵子実行委員長（2000.3.26）
2000年度	第10回NEW看護学セミナー 道重文子プランナー テーマ：「高齢者の肺炎を防ぐ口腔ケア：新しい看護技術の方法と科学的根拠」 第14回学術集会（京都） 西田直子実行委員長（2001.3.20） 近畿・北陸地方会事務局が神戸市看護大学内に移転。平河勝美氏に交替する。
2001年度	地方会世話人代表の任期と本学会理事・評議員の任期のずれに伴い、不具合が生じているため、本学会役員任期にあわせることとして世話人代表選挙の時期を繰り上げて実施。近畿・北陸地方会は新たに玄田公子氏が、中国・四国地方会は深井喜代子氏が代表に選出され、半年間は新・旧二人の代表制をとる。 第11回NEW看護学セミナー 瀧川 薫プランナー テーマ：「看護における患者個人情報の管理」 第15回学術集会（香川） 岸（今井）敬子会長、猪下光実行委員長（2002.3.3）
2002年度	各地方会の会員数ならびに看護系大学、学会の増加に伴い、地方会活動を合同で実施することの困難や意義について見直し、今後のあり方を検討するためのプロジェクトチームが発足。2003年度以降の分離独立開催を提案（2002.6.16） 世話人会でプロジェクトチーム案の承認（2002.7.26） 第12回NEW看護学セミナー 田島桂子プランナー テーマ：「求められる看護実践能力育成への方策を考える」 第16回学術集会（神戸）開催 宮島朝子実行委員長 会員にニューズレターで活動の分離独立について意見を募る 総会にて分離独立案の承認（2003.3.16）
2003年度	中国・四国地方会単独の活動となり、今後の活動のあり方について、深井喜代子世話人代表のリーダーシップのもと、評議委員会を中心に各県から2～4名の新プロジェクト委員を募り検討会を開催。第1回会議（2003.7.14） 活動内容は、学術集会の開催とニューズレターの発行のみとする。 世話人会の構成員の規定、選出方法について検討。 ①地方会役員には、中国・四国地区選出の評議員の1/3（約10名）を含むこととする。1/3の選出方法は、評議員の互選による。 ②①以外に、各県から2名の役員を選出する。選出方法は、各県の委員に一任する。 ③役員の任期は3年とし、再任を妨げないが6年を超えて在任することはできないとする。 ニューズレターNo.11により変更案を提示し意見を募る。 第2回会議（2003.10.5） 地方会会則の改正案を検討。 役員に運営委員長（世話人代表から名称変更）、会計・事務局2名、会計監事2名をおき、その他の運営委員も広報委員会（4名）または学術委員会（各県1名以上）のいずれかに所属する体制とする。上記を総会にて承認。中国・四国地方会会員数672名 第17回学術集会（鳥取） 宮脇美保子実行委員長（2004.3.7）

2004年度	新体制で運営委員会を発足。運営委員の互選により初代運営委員長に引き続き、深井喜代子氏が選出される。 また、運営委員会内にニューズレターの発行を所管する広報委員会と地方会の研究活動の推進を所管する学術委員会を設置し、運営委員は役員の他に、全員がいずれかの役割を担う体制とした。 第18回学術集会（島根） 岡崎美智子実行委員長（2005. 3. 13）
2005年度	中国・四国地方会会員数731名 第19回学術集会（愛媛） 河野保子実行委員長（2006. 3. 19）
2006年度	第20回学術集会（高知） 梶本市子実行委員長（2007. 3. 4）
2007年度	前運営委員長の任期満了に伴い、運営委員の互選により宮腰由紀子氏が新運営委員長に選出される。 第21回学術集会（岡山） 村上生美実行委員長（2008. 3. 2）
2008年度	第22回学術集会（山口） 山勢博彰実行委員長（2009. 3. 8） 中国・四国地方会会員数800名を超える
2009年度	第23回学術集会（香川） 内藤直子実行委員長（2010. 3. 7）
2010年度	前運営委員長の任期満了に伴い、運営委員の互選により山勢博彰氏が新運営委員長に選出される。 第24回学術集会（徳島） 川西千恵美実行委員長（2011. 3. 6）
2011年度	第25回学術集会（広島） 宮腰由紀子実行委員長（2012. 3. 4）
2012年度	第26回学術集会（鳥取） 前田隆子実行委員長（2013. 3. 3）
2013年度	第27回学術集会（愛媛） 中西純子実行委員長（2014. 3. 9）
2014年度	前運営委員長の任期満了に伴い、運営委員の互選により大森美津子氏が新運営委員長に選出される。 本学会の「地方会細則」の改正に伴い、地方会役員構成・選出方法について地方会会則を変更（2015. 4より）。各県の運営委員を選挙で選出し、選ばれた運営委員のなかから役員（会長・副会長・会計・監事）を互選することとなる。 第28回学術集会（島根） 吉川洋子実行委員長（2015. 3. 8）
2015年度	改正地方会会則にのっとり、WEBにより運営委員の選挙を実施。 中国・四国地方会会員数1,000名を超える 第29回学術集会（高知） 坂本雅代実行委員長（2016. 3. 6）
2016年度	選挙で選出された運営委員の互選により、新運営委員長に内田宏美氏が選出される。 30周年記念事業への取り組み ・記念誌発行準備（2017. 8発行） ・中国・四国地方会設立30周年記念講演開催 演題 「地方会学術集会活動30年の軌跡から展望する看護学のこれから」 講師：深井喜代子氏 第30回学術集会（岡山） 深井喜代子実行委員長（2017. 3. 19）

一般社団法人日本看護研究学会中国・四国地方会 会 則

第1条（名称）

本地方会は、一般社団法人日本看護研究学会中国・四国地方会と称する。

第2条（目的及び事業）

本地方会は、一般社団法人日本看護研究学会の地方組織として、中国・四国地区において、看護学の研究と教育ならびに実践の進歩発展に寄与することを目的とし、次の活動を行う。

- 1) 総会の開催
- 2) 学術集会の開催
- 3) 関係団体との連絡提携
- 4) 会員相互の親睦
- 5) その他、本地方会の目的達成に必要と認められる活動

第3条（会員）

本地方会の会員は、中国・四国地区の一般社団法人日本看護研究学会会員をもって組織する。

第4条（組織）

- 1) 地方会は、重要事項を審議し、活動の企画、運営を行うために、運営委員会を組織する。
- 2) 運営委員会は、一般社団法人日本看護研究学会中国・四国地区理事（全員）と各県3～4名ずつの委員をもって構成する。
- 3) 各県の委員には評議員1～2名を含むことが望ましい。1県に複数の評議員がいる場合は互選により選出される。
- 4) 各県定数3～4名のうち、評議員以外の委員は、選挙により選出される。
- 5) 運営委員会には、学術委員会と広報委員会を置く。
 - (1) 学術委員会
 - ①各県1名以上の委員からなる。
 - ②学術委員は、次期学術集会実行委員長を運営委員会に推薦する他、本地方会における学術活動を推進する。
 - (2) 広報委員会
 - ①広報委員4名からなる。
 - ②広報委員は、広報に関する活動を行う。
- 6) 運営委員の任期は3年とし、原則として期間中の欠員補充を行う。

第5条（役員）

- 1) 運営委員会に以下の役員を置く。
 - (1) 会 長 1名
 - (2) 副会長 1名
 - (3) 会 計 1名
 - (4) 監 事 2名

- 2) 役員は、本地方会会員による選挙で選ばれた運営委員会委員の中から互選により選出される。役員には、一般社団法人日本看護研究学会（以下、本会とする）の理事を1名以上含めなければならない。理事は会長もしくは副会長の任にあたる。
- 3) 会長は、本地方会を代表して会務を統括し、本会の定時社員総会に出席して本会との調整を行う。理事・評議員の中から選出する。
- 4) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはこれを代行する。
- 5) 会計は、本地方会の会計管理を行う。
- 6) 監事は、本地方会の会務を監査すると共に会計年度終了後に会計監査を行う。

第6条（総会）

総会は、毎年1回以上、会長が招集して開催し、会務および会計を報告し、諸事項を決議する。

第7条（地方会学術集会等）

- 1) 学術集会ごとに、実行委員長をおく。
- 2) 学術集会実行委員長は、運営委員会から選出し、総会の承認を得る。

第8条（会計）

- 1) 本地方会の運営は、本会からの補助費、事業に伴う収入および寄付金などにより行う。
- 2) 会計年度は、事業・活動年度と同一期間とする。
- 3) 決算後に、本会からの補助金に残金がある場合は、本会に返還する。

第9条（事務局）

事務局は、会長が所属する機関内におく。会長は、地方会運営の庶務を取り扱うために、庶務担当者を置くことができる。その場合の担当者は、運営委員に限らない。

第10条（改廃）

会則の変更は、運営委員会の議を経て総会の決議によって行う。

- 付則 この会則は、平成5年7月30日より実施する。
付則 この会則は、平成16年3月7日より実施する。
付則 この会則は、平成22年3月7日より実施する。
付則 この会則は、平成26年3月9日より実施する。
付則 この会則は、平成27年3月8日より実施する。
- 2 但し、現運営委員の任期が平成28年3月31日までであり、選挙による運営委員の選出は平成27年度以降の実施となるため、第4条4)、第5条2)にかかわらず、この会則改正後の平成27年度役員は、運営委員の評議員の中から選出する。

編 集 後 記

C地区期、近畿・北陸地方会との合同事業開催期、本地方会単独活動期と変遷を重ねてきた中国・四国地方会の30年の歴史を残す一冊が出来上がりました。記録が保存されていないものもあり、残念ながら一部データが抜けている箇所もあります。また、もっと掲載したい情報や写真もありましたが、限られた予算のなか、中国・四国地方会が単独で学術集会を開催するようになって以後の記録が中心になってしまいましたことをご容赦ください。記憶をたどりながら当時に思いを馳せ、お忙しい中、原稿をお寄せ下さった歴代の代表、学術集会実行委員長ならびに川口理事長には厚くお礼申し上げます。

個人的には、第1回学術集会から参加し、長らく事務局を担当してきた者として、ここに30周年記念誌を発行することができましたことには感慨深いものがあります。資料を収集し、編集作業をしながら地方会とともに育ち、育てられてきたことを改めて感じております。新しく会員になられた方たちにも本地方会の歴史を是非、知っていただきたいと思います。そして、この30周年記念誌の発行が今後のさらなる発展・飛躍につながるものとなりましたら幸いです。

最後に、発行にご協力くださったすべての皆様に改めて感謝申し上げます。

(編集委員長 中西 純子)

一般社団法人日本看護研究学会中国・四国地方会30周年記念誌編集委員会

委員長 中西 純子(愛媛県立医療技術大学)
委 員 西田 佳世(聖カタリナ大学)
内田 宏美(島根大学)
深田 美香(鳥取大学)
祖父江育子(広島大学)
吉永 純子(徳島文理大学)

一般社団法人日本看護研究学会中国・四国地方会30周年記念誌

平成29年8月1日 発行

発 行 所 〒693-8501 島根県出雲市塩冶町89-1
島根大学医学部看護学科基礎看護学講座 内田宏美研究室内
一般社団法人日本看護研究学会中国・四国地方会事務局

発行責任者 内田宏美

印 刷 所 セキ株式会社
〒790-8686 愛媛県松山市湊町7丁目7番地1
TEL 089-945-0111(代)

